

## 国内経済情勢

### 概 観

国内需要は個人消費、設備投資を中心に着実な拡大傾向を続けており、5月の生産・出荷は高い伸びを示した。雇用面では有効求人倍率が上昇し、失業率も3ヵ月ぶりに低下するなど緩やかな改善傾向が続いている。

6月の商品市況をみると、鉄鋼、繊維等は落着き気味に推移したが、石油製品が一段と高騰を示し、製材、合板も海外原料高を映じて続伸した。一方卸売物価は、国内需給地合いの引締まりを背景として海外原料高の国内価格への波及が石油製品、製材・木製品などを中心に一層進行したため引続き大幅な上昇を示した。消費者物価は灯油・ガソリンの値上りもあって前年比上昇率が高まった。

金融面では、6月の金融市場は繁忙裡に推移し、また5月の全国銀行貸出約定平均金利は前月に引続き上昇した。

5月の国際収支をみると、経常収支、総合収支とも赤字を続けたが、総合収支の赤字幅は長期資本収支流出超の大幅縮小などから前月を下回った。6月の為替相場は月中小幅の円高となった。

#### 生産・出荷は大幅な増加

5月の鉱工業生産(季節調整済み、前月比\*、速報)、同出荷(速報)は、それぞれ+1.6%、+2.6%と前月の伸び(各+0.8%、+0.6%)を上回る大幅

な増加となった。この間生産者製品在庫(速報)は、出荷の好伸を背景に-1.1%とかなりの減少を示し、同在庫率(50年=100)も2.9ポイント低下した(5月75.0)。

\* 以下増減率は特に断らない限り前月比または前期比(物価を除き季節調整済み)。

5月の生産・出荷の財別特徴をみると、生産財が鉄鋼などを中心に増勢を持続したほか、消費財も乗用車・繊維二次製品の増加などから堅調を続け、また一般資本財の出荷も民間設備投資関連機器(電動機、産業用電気機械等)の続伸に加え前月伸び悩んだ官公需関連機器(土木建設機械等)の増加もあって高い伸びを示した。一方製品在庫の面では、石油、石油化学製品がユーザー筋の手当て積極化を映じ大幅減少を示したのが目立った。

国内最終需要の動向をみると、5月の公共事業契約額(前年比)は-11.2%と前年水準を下回り、6月の公共事業請負額(前年比)も前月増加のあと-2.2%と再び減少した。

設備投資動向については、5月の機械受注額(船舶・電力を除く民需)は、前月著増(+32.3%)のあと-23.3%と反動減となったが、前年同月との比較では+18.2%増となお高い水準を持続している。

消費面では、5月の全国百貨店売上高(前年比、速報)は初夏物衣料品の売行きがやや鈍化したものの、家具、レジャー用品、食料品の好調から+7.8%と引続き順調な伸びを示した。耐久消費財の売行きをみると、家電製品はエアコン、カラ

ーテレビなどを中心にこのところ好調に推移しているが、6月の乗用車新車登録台数(前年比、速報)は、前月好伸のあと+1.8%の増加にとどまった。

雇用情勢をみると、5月の有効求人倍率が求人数の大幅な増加から0.69倍と前月に続き上昇し、完全失業率も2.01%と3ヵ月ぶりに低下するなど緩やかな改善傾向を続けている。

### 石油製品の市況が急騰

6月の商品市況をみると、天然糸(綿糸、毛糸)が機屋筋の糸手当一服などから軟化し、鉄鋼、非鉄地金も落ち着き気味に推移したが、石油製品が6月末 OPEC 総会における原油価格の再引上げ見込みや中小ユーザー筋の先行き供給削減に対する不安感などを背景に急騰を示し、製材、合板も海外原料高を映じて続伸した。

6月の卸売物価は海外原料高や国内需給地合いの引締まりを映じて+1.3%と引続き大幅な上昇を示した(前年同月比+5.2%)。品目別には、石油製品が原油価格上昇に伴う製品価格引上げの浸透から大幅に上昇し、製材・木製品も一段高となった。

6月の消費者物価(東京、速報)は、野菜、果物等季節商品が値下りしたものの、灯油、ガソリンや被服の値上りに加え国鉄運賃の上昇もあって-0.3%と小幅の低下(前年-1.1%)にとどまり、前年同月比では+3.7%と前月(+2.8%)に比し上昇率を高めた。

### 金融市場は繁忙裡に推移

6月の金融市場をみると、銀行券は10,080億円の発行超と前年(同9,399億円)をやや上回り、月中平均発行高(前年比)は+12.2%となった(前月+14.2%)。一方財政資金は、一般財政の払超が

ほぼ前年並みの規模にとどまったものの国債発行額が前年を下回ったため、2,666億円の払超と前年(同160億円)に比し払超幅を拡大した。この結果、月中の資金不足額は7,178億円(前年同8,737億円)となり、市場地合いは通月繁忙裡に推移した。

こうした状況を反映して、コールレート(無条件物、中心レート)は官民ボーナス支給に伴い銀行券が増発に転じた月央以降上昇に向い、前月末を0.375%上回る水準で越月した(月末5.625%)。また手形売買レート(二山越え)も月中+0.5%の上昇を示した(月末6.0%)。

5月の全国銀行貸出約定平均金利は、+0.110%と前月(+0.017%)に比べ上昇幅を拡大した。この間、5月のマネーサプライ(M<sub>2</sub>平残、前年比)は、財政資金の支払が増加したうえ金融債等の金利改定待ちの資金滞留もあって+12.7%と前月(+12.2%)に比し伸びを高めた。なおM<sub>2</sub>に5月以降発足したCDを加えるとその前年比伸び率は+12.8%となっている。

6月の公社債市況は、月初来軟化を続け最長期物国債の市場利回りは一時9%を上回ったが、資金運用部による6.1%国債の売戻条件付買入れや国債引当金の繰入方法変更等の措置発表を背景に下旬に入り反発に転じた。一方株式市場では、OPEC 総会を控えて石油価格動向に対する警戒感が強く、薄商内の裡に市況は保合い圏内の小動きにとどまった。

### 総合収支の赤字幅縮小

5月の国際収支は、輸出が前月落込みのあと大幅な増加を示したため、貿易収支(季節調整後)は前月を上回る黒字(848百万ドル、前月267百万ドル)となったが、貿易収支季節調整後の経常収支は、小幅ながら引続き赤字となった(33百万ドルの赤

字、前月同 501 百万ドル)。この間長期資本収支は、対外債券投資の減少に加え対日債券投資が流入超に転じたことなどから前月を大幅に下回る流出超となり、総合収支は 754 百万ドルの赤字と前月(2,973百万ドル)に比し赤字幅を縮小した。

5 月の輸出(通関、ドルベース)は、テレビ、二輪自動車等が前月に続き減少したものの自動車、鉄鋼が米国向けを中心に好伸したため +10.0%と大幅な伸びを示し、数量ベースでも前年水準を上回った(前年同月比 +3.7%)。

一方輸入(通関、ドルベース)は、原油、非鉄金属鉱等が価格の上昇を主因に増勢を続けたが、羊毛、鉄鉱石などが減少したため -0.7%と増勢一服を示した。輸入数量は原油の入着増から高水準であった前年との比較では伸び率が大幅に鈍化した(+4.7%、前月+15.0%)。

6 月のインターバンク米ドル直物相場は下旬に入りやや円高となり月末217円00銭で越月した(月中2円70銭の円高)。

(昭和54年7月10日)